



美唄今昔 (その4) 三井美唄炭鉱病院の産声

美唄歯科医師会会員 雨田 実



三井美唄炭鉱閉山時に、炭鉱病院の内科医長で美唄育ちの、浅沼英一先生編著の歌集「坑底の花」によると、「美唄は私の父が大正13年、初めて三井炭鉱の坑口を開き、私が三井美唄炭鉱病院最後の内科医長として終わったところである」と書かれている。美唄町史、美唄市百年史その他によると、三井美唄炭鉱が本格的に炭鉱経営の操業を始めたのは昭和3年であるが、その前身である日本石油系の宝田（ホーデンと読ませるから面白い）石油が三井鉱山の鉱区の一部を借りて、宝田炭鉱として採炭を始めたのが大正13年と記されているから、その時を指していると思われる。その頃は採炭も大部分は人力で行うことが多く、オヤジさんが先山、オカミさんが後山役で1つの現場を受け持って採炭することも決して珍しくなく行われており、坑内は絶対に煙草を持っての入坑は許されないのでペアで入坑しているので、煙草代わりに!!なぞということも?あったとか。

昭和3年三井鉱山が日石から完全に全部（人員も900人弱）を引き継いでからは、資本力と徹底した機械化により合理化に力を入れた結果、人員は5百名に減少したのに、昭和8年には昭和3年引き継ぎ時の3.5倍の出炭量に増産したというから、三井鉱山の経営能力はさすがと言われたが、労務管理と合理化は、すさまじいものであったであろうことは予想できる。

炭鉱病院はその前年の昭和7年、三井美唄炭鉱病院として産声を上げたという。初代は大塚院長である。従業員が大幅に減少したのに能率を上昇させるためには全面的に機動力に頼るため、負傷者を考慮して病院の整備充実に意を用いたらしく、昭和7年11月、内科、外科、薬局、手術室、医員宿直室、看護婦宿直室、重症室3（1室ベッド2）大病室1（ベッド10）で始まったものが、昭和10年レントゲン検査室新設、翌11年12月、増改築及び模様替え、内科、外科、手術室、準備室、器械室、玄関、待合室、受付、看護婦宿直室改増築、医員室、看護婦・職員浴室、患者浴室、洗濯及び乾燥室、炊事場、包帯材料洗濯室新設、旧内科、薬局、手術室、待合室の模様替え、大病室2（20床）重症室2（3床）計23床となる。この時に要望が多く有り、歯科室が出来たらしく思われる。

昭和12年、中田病院長就任第2代。歯科は南美唄で開業していた扇谷一貫先生が囑託の形で、歯科室の責任者をされたと思われる。その上経済不況脱出のはけ口として、昭和6年満州事変、7年上海事変と、大陸への進出のため軍需産業の発展によって、石炭需要は増加していった。昭和初期の大変な不景気の時代に、宝田炭鉱から事業を引き継いだという三井鉱山は果たして5年先、10年先を予想して経営に乗り出したのであろうか?もしそうだとすれば、さすがとい

うしかないが、それから幾年も経ないで、人間の常識を超え学識を超えておこれり日本世界と戦うとなつては、まことにあとの祭りであった。現在の日本もそうであるが経済の底が浅いため、天日為に暗しの貯炭の山が、いつの間にか低くなったと思うと、すぐ増産の号令が大陸方面から響いてくる有様であったらしく、昭和11年の日本の総エネルギーの構造は石炭62%、電力19%、石油9%、その他10%で、石炭が圧倒的地位であったようである。

昭和12年5月1日、美唄大火。同業者では北野先生と小川先生が難に遭われたという。絶後とはいえないかもしれないが美唄始まって以来の空前の大火で400戸近い焼失家屋を出した大災害であったという。同年7月7日、日支事変起こる。同業者では、扇谷一貫先生、月形町開業の三浦萬蔵先生に間もなく赤紙がくだり応召された。三井美唄炭鉱病院歯科の責任者が征かれて困ったところ、当時美唄町議でもある兄の扇谷重憲先生が歯科医師のため炭鉱病院歯科に応援に来て頂いたらしく、昭和13年12月当時炭鉱病院の内科の本山先生(軍医中尉) 応召で(現本山医院院長の父上) 病院全員の記念写真に中田院長の隣に本山先生と一緒に重憲先生の姿が見られる。意外な発見は森下歯科技工士がいた。

一貫先生は出征中に名誉の負傷を、男自慢の向こうキズを肩間に受け帰郷、凱旋され、ご兄弟で炭鉱病院歯科を守られたという軍功によって勲7等青色桐葉章、功6級金鷄勲章を受章、祭日には、それを胸に意気揚々として出席されたという。大戦末期には再度応召され、病院はまた重憲先生に頼み、奈良の連隊に入隊せしも内地勤務のまま終戦をむかえられたとのことで、その間ご長男の明典先生は奈良で過ごされ、小学校に通学されたという。一貫先生は随分と軍隊と縁の深い方のように、昭和初めに歯科医師

になられた後にも現役で入営され、満ソ国境の守備隊の勤務をされたという。メッタに唄を歌わない一貫先生が酔った時に歌う唄は唯一つ。「水も豊かな黒竜江の岸の繁みは吾が住み家、水を鏡にヒゲ面れば、満州娘も、ひと眼ぼれ」残念ではあるが、その歌の正式の題名は分からない。

昭和18年東美唄にあった徳田炭鉱を三井炭鉱が買収して、三井新美唄炭鉱が誕生し、12月19日病院がベッド12床、医師3名、歯科医師1名(谷本芳信先生)のスタッフで開院したという。戦争が拡大し、益々石炭の需要が多くなって当時中学校(旧制)であった現在の美唄工業高校生徒は戦争末期には実習入坑という形で初めは勤労奉仕の報国授業であったが、昭和19年には通年動員され通学が直ぐ入坑であったという。また男性は多くの人達が戦地に征ってしまったので食糧増産のため他の学校は援農作業に動員された時代であったという。しかし不慣れな作業のために能率は上がらないのに、負傷する人が多く、病院は随分と多忙であったという。栄養が悪いことも病気の治癒を遅くすることも当然すぎるはずであったと思われる。随分と不思議なのは、その時分に今の滝川市、その頃は町であったであろうが、人造石油という会社があって、石炭から石油を製造するという目的のために、美唄からも多くの人が働きに行っていたという。果たして出来たものか?現在でも石炭から石油が出来ないのに、戦争が長期になると随分変な会社とか仕事が増えるようである。終戦後その会社は滝川化学という名の会社になったというが、現在存在しているであろうか?終戦後の炭鉱病院に関しては次回にして、とりとめない三井美唄炭鉱病院歯科の戦前戦中を綴ってみたけれど、分かったような、分からない話で恥じ入るばかりである。